

## 幼年時代の記憶と集合的記憶(3)

神谷 英二

**要旨** 本研究は全体で3部からなり、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」という問いに対して、ベンヤミンの思索を手がかりに考察を行ってきた。第3部である本稿では、残された課題である「記憶の帰属・記憶の主体」と「追想の時」について探究した。まず、「記憶の帰属・記憶の主体」の考察では、リクールによる仮説を援用し、「幼年時代の記憶の主体」と「集合的記憶の主体」について解明した。前者については「せむしの小人」との関わりが描き出され、後者については「非人称」の他者であることが分かった。次に、「追想の時」とは「書き留める者の現在」が「現在時」となった瞬間であることが明らかとなった。そして最後に、これまでの考察をもとに、幼年時代の記憶と集合的記憶の関係は、根源への門となる一回性と反復性の弁証法的関係であることが明らかとなり、当初の問いに対して最終的な解が与えられた。

**キーワード**：ベンヤミン リクール 幼年時代 記憶 集合的記憶 根源

### 1 はじめに

「幼年時代の記憶と集合的記憶」と題する本研究は、全体で3部からなり、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」という問いに対して、ヴァルター・ベンヤミンの思索を手がかりに考察を行ってきた。第3部である本稿では、前稿までの研究の結果残された課題について探究した上で、これまでの考察をもとに、この当初の問いに対して、最終的な解を与えることが使命となる。

ここで、本研究に残された課題を確認する。それは、「記憶の帰属」あるいは「記憶の主体」を問うことと、「追想の時」について考察することである。

### 2 記憶の帰属、あるいは記憶の主体

それでは、「幼年時代の記憶の主体となり得るのは誰なのか」、「集合的記憶とは誰の記憶なのか」という問いについて考察を開始しよう。

「記憶の帰属・記憶の主体」に関する問いについては、ベンヤミンの思索とともに、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』（特に、第3章「個人的記憶と集合的記憶」）が導きの糸を示してくれる。そもそもリクールの理解では、記憶は「時間と物語の中間レベル」に位置するものであり、『時間と物語』と『他者のような自己自身』における問題提起の間隙を埋めるべく、彼は晩年のこの大著で、記憶と忘却の問題に集中的に取り組んだのである。彼は、「過剰な記憶」と「過剰な忘却」に困惑し、「公

「正な記憶の政治学」を重要なテーマとしてこの研究に取り組んだと表明している。(Ricœur 2000, I)

さて、『記憶・歴史・忘却』のなかで本研究にとって特に重要なのは、次の仮説である。

「記憶を自己へ、身近な人々へ、他者へ三重に賦与するという仮説」(Ricœur 2000, 163)

ここで述べられる「身近な人々」は、「近くにいる他者」であり、「特権をもつ他者」のことである(Ricœur 2000, 162)。この人々は、私の誕生と死の間に、「相互に、平等に評価し合って、私が存在するのを承認し、私も彼らの存在を承認する」人たちである。相互の承認とは、「各人が自分のできること、できないことについて明言することを共有すること」とされる(*ibid.*)。また、この仮説のなかの「他者」は、「遠くの他者」とも言われる存在者である。

リクールは、歴史の領野へと研究を進めるには、個人的記憶と集合的記憶の両極性という仮説だけではなく、上記の仮説が必要だと考える。彼は、現代では「記憶活動の真の主体についての問い」(Ricœur 2000, 112)が議論の前景を占める傾向があることを指摘する。そもそも歴史家にとっては、記述の対象は「行為の当事者一人ひとりの記憶」か、「集合体全体の記憶」かを知ることが重要とされる。しかし、彼は「記憶とはもともと個人的か集合的か」というどうにもならない二律背反をいったん回避し、敢えて迂回路を通る戦略をとって、「記憶活動の真の主体についての問い」に答えようとする。そして、その代わりに「想起(*souvenir*)の受け入れに反応する情感と想起の探究という実践を誰に帰属させるのが正当か。」(*ibid.*)という新たな問いを立てるのである。

この問いに答えてゆくには、記憶は個人的か

集合的かという二者択一から逃れ、「前もって文法的人称の全部に向かって開かれた帰属の空間」(Ricœur 2000, 113)が必要であり、リクールは「非人称」にまでもこの空間を開くと言う。この「非人称」は、人間ではないということの意味するのではなく、「ひと(*on*)、誰でも(*quiconque*)、各自(*chacun*)」と言い換え可能なものである。したがって、リクールの考える他者には、一人称以外の「文法的人称の全部」と「非人称」までもが含まれることになる。

以下の『パサーージュ論』の断章に現われる、私のものではない「ある過去」。この過去こそは、まさに非人称の集合的記憶に沈殿する過去であろう。

「街路はこの遊歩者を遙か遠くに消え去った時間へと連れて行く。遊歩者にとってはどんな街路も急な下り坂なのだ。この坂は彼を下へ下へと連れて行く。母たちのところという訳でなくとも、ある過去へと連れて行く。この過去は、それが彼自身の個人的なそれでないだけに一層魅惑的なものとなり得るのだ。それにもかかわらず、この過去はつねにある幼年時代の時間のままである。それがしかしよりによって彼自身が生きた人生の幼年時代の時間であるのはどうしてであろうか。」[M1, 2]

したがって、厳密に定式化するならば、ベンヤミンが探究しているのは、「身近な人々の集合的記憶」や「人称が特定できる人々の集合的記憶」なのではなく、「非人称の記憶」と言い得るものであることが明らかになる。

それでは、記憶が賦与される自己はどのように記述されるのだろうか。リクールは、「個々の人生の脆い自己同一性をなす想起全体を自己に帰属させる」ことは、「距離を置く疎隔の契

機と自己帰属の契機との間の絶えざる媒介」から発してくると考える (Ricœur 2000, 645)。そして、「私が一連の想起全体を、自分のもの、私の所有とみなすのが許されていると感じるには、過去の想起が現われ出るよう促される場面を、私が離れて眺められることが必要である。」(ibid.) と主張する。

ベンヤミンの幼年時代の記憶を思い出す働きは、単なる意志的記憶としての想起ではなく、無意志的記憶とも異なっている<sup>(1)</sup>。それは、彼に固有の「追想 (Eingedenken)」という考古学的発掘に譬え得る「探索的な想起」であり (GS IV, 400f.)、『ドイツ悲劇の根源』での考えを用いれば、「根源的了解へと遡る想起」である (GS I, 217)。これはその場面全体を距離をもって眺められるようなものではない。したがって、一連の想起全体を私の所有とみなすのは困難である。ベンヤミンの追想は、遊歩者として彷徨ううちにいつの間にか根源へと下降するものであり、「離れて眺める」という対象化が、本質的にあり得ないものである。ここから、幼年時代の記憶の主体が、私=自己であることは認めざるを得ないが、それを思い出す働きは「私の所有」と言える状態で私に帰属しているのではないことが明らかになる。

それでは、幼年時代を思い出すとき、私はどのような在り方をしているのだろうか。この問いについて考究することは、同時に遊歩者の在り方を問うことでもある。

ここにあの「せむしの小人」が「先回りして、邪魔をする」(GS VII, 430) かのように登場する。

### 3 「せむしの小人」と記憶の主体

そもそも、「せむしの小人」は、アルニム (Achim von Arnim) とブレンターノ (Clemens Brentano) が共同で編集し、1805年から1808年にかけて出版された民謡集『少年の魔法の角笛』(Des Knaben Wunderhorn) のなかに収められているものである。

川村も指摘するように、ベンヤミンの「せむしの小人」について分析する際には、『フランツ・カフカ』での論述が重要である。頭を胸に垂れ、前かがみになった人間の姿。カフカの作品に現われる数々の醜く歪んだ形象。ベンヤミンはその原像として「せむし」を想定し、「せむしの小人」に強い拘りを示していたのだ。(川村 1991, 302)

また、『ベルリンの幼年時代』では、せむしの小人は「とんがり帽子の地の精」の形象とも重ね合わされ、「子どもからの目覚め」を理解する上で、重要な役割を与えられている。次に挙げるのは、幼年時代からの断絶の場面を描いた、『ベルリンの幼年時代』の「月」という断章の一部である<sup>(2)</sup>。

「この覚醒は、それまでの覚醒とは異なり、夢の終着点を定めるものではなく、夢が終着点を見逃してしまったことを、そして、子どもの私が経験してきた月の支配は私のこれ以後の全生涯にわたって崩れ去ったことを、私にそっと告げ知らせていた。」(GS IV, 302)

浅井も指摘するように (浅井 1997, 669)、ここには「時間の二重化」がある。子どもは目覚めてしまう。しかし、この目覚めは、それまでとは異なり、夢は終着点が分からず、終わることができない。もはやここにはかつての「庇護された安らかさ」(GS VII, 385) はない。そ

して、昼の世界で私が成長するにしたがって、まなざしの縮尺は変化し、物は私から離れてゆき、縮んでしまう (GS VII, 430)。その縮んでいった物のなかに、終着点を見失った夢とともに内なる子どもが棲みつくのである。この内なる子どもこそ、「せむしの小人」である。そして、「母親の衣服のすそにしがみついていたときに顔をうずめていたその古い衣服の襞のうち」へと下降してゆく、大人のまなざしのなかに、終着点を見失った夢 (幼年時代の記憶) は、もはや絶たれたものとして、沈殿して存在し続けることになる。

小人は、成長したベンヤミンに対して先回りし、「私が手に入れたものすべてのうちの半分、忘却という半分」 (GS VII, 430) を取り立てる。しかし、ベンヤミンは小人の姿を見ようとしても見ることはできず、いつも小人がベンヤミンを見ていたというのである。終着点を見失った夢とともに内なる子どもが、大人のまなざしのなかに、沈殿して存在し続けているのである。

さらに、『ゲーテの「親和力」』には、「小さなもののなかでの幸福」という言葉が登場する。「小さなもののなかでの幸福」こそが、ゲーテの『新メルジーン』の唯一のモチーフであるというのが、ベンヤミンによる見立てである。小さなものの幸福には、「小箱のなかの小人族の宮殿が、小人から一瞬の間にもとの人間の姿に戻った男によって、粉碎の危険にさらされるように」、いつ何時、突然に砕け失せるとも知れぬ儂さが染み込んでいる (川村 1991, 313)。小人族の姫と契りを結びながら、人間の姿に戻った男の姿が、遊歩者の形象には反映されている。そもそも小人族の国は、「人間のためではない希望の宿る場」 (*ibid.*) である。このように、小人は二つの世界に関わる両義的な

存在である。また、小人の国は儂いけれども、希望の宿る場なのである。

「せむしの小人」は、子ども (幼年時代の私) の近くにいなながら、リクール言う「身近な人々」には含まれない。私と「せむしの小人」の間には「相互の承認」は成立しないからである。見ているつもりが見られている。これが私と「せむしの小人」の関わりである。

「アウラ」を考察の対象とした際に、本研究第2部でもすでに言及したように (神谷 2012)、見つめられている者、あるいは見つめられていると思っている者は、まなざしを開くのである。それゆえ、「ある現象のアウラを経験するとは、この現象にまなざしを開く能力を付与すること」 (GS I, 646-647) である。すなわち、幼年時代の私は「せむしの小人」のアウラを通して、まなざしを開かれているのである。

この独特のまなざしに関する理論の基底には、ベンヤミン独自の認識論が存在する。ベンヤミンの「認識」概念について考察する際には、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』において、ロマン主義の対象認識についての理論の根本命題に関する最も精密な形式として提示される次の一節が、不可欠のものである。

「ある存在者 (Wesen) が他の存在者によって認識されることは、認識されるものの自己認識、認識するものの自己認識、および、認識するものがその認識対象である存在者によって認識されることと、同時に起こる。」 (GS I, 58/WN 3, 63)

こうした認識の在り方に基礎づけられ、「見ることが見られることに転じ、見ることによって外界の物が内界に食いこむというプロセス」 (川村 1991, 316) が生じることになる。

そして、この認識論が、『ベルリンの幼年時

代』に描かれた、「私」と「せむしの小人」との、見る・見られるの関係にも働いている。「私」は、「せむしの小人」に見つめられている、あるいは見つめられていると思っており、それゆえ、まなざしを開いているのである。

以上の議論から、幼年時代の記憶の主体である私は、他者から切り離された自我や意識なのでなく、つねに「せむしの小人」を見ようとして見られていた私であることが分かる。そして、この記憶を追想によって発掘する者は、「内なる子ども」に見られながら、かつて取り立てられた「忘却」を取り戻そうとしているのである<sup>(3)</sup>。

#### 4 追想の時

それでは、この「忘却」を取り戻すことができるのはいつなのか。本研究は最後の課題として「追想の時」に関して、『歴史の概念について』を主要な手がかりとして考察を進めることになる。

『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』において、ボードレールの作品にしばしば現われる特異な日々に関わって、ベンヤミンは次のように指摘していた。

「この目立つ日々というのは、ジュベールの言葉で言えば、完成する時の日々である。それは追想(Eingedenken)の日々である。」(GS I, 637) モラリストであるジョセフ・ジュベールは、彼の『随想録』のなかで、「時は永遠のなかにも見出される。しかしそれは地上の、世俗の時ではない。……その時は破壊しない。完成するだけだ」(GS I, 635)と述べている。したがって、この「目立つ日々」とは「永遠のなかの時」なのである。

この「永遠のなかの時」、「完成する時」こそが、ここで探究する対象である。

例えば、『歴史の概念について』第XIVテーゼでは、次のように述べられている。

「歴史は構成の対象であって、この構成の場をなすのは均質で空虚な時間ではなく、現在時(Jetztzeit)によって満たされた時間である。」(GS I, 701/ WN 19, 102)<sup>(4)</sup>

さらに、第Vテーゼでは、「記憶」の偶然性を巡って、次のような記述がある。

「過去の真の形象はさっと掠め過ぎてゆく。過去は、それが認識可能となる刹那に一瞬ひらめき、もう二度と立ち現われはしない。」(GS I, 695/ WN 19, 95)

わたくしの『パサーージュ論』に関する研究(神谷 2009)の結果、遊歩者には「最高に弁証法的な断絶点」[N3a, 3]である覚醒の瞬間、「認識が可能となる今」が到来することが分かっていた。遊歩者に到来するこの目覚めは、同時に追想でもある。そして、これは従来の「一般史」(Universalgeschichte)に代表される歴史主義とは全く異なる、「歴史的唯物論」による歴史を構成する「歴史学の新たな弁証法的方法」となる。新たな方法が探究するのは、ほかでもない「根源史」(Urgeschichte)である。

そして、第VIテーゼでは次のように述べられている。「過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それをく実際にあったとおりに>認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを言う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史の主体に思いがけず立ち現われてくる、そのような過去の形象を確保することこそが重要なのだ。」(GS I, 695/ WN 19, 95f.)

「現在時」、「覚醒の瞬間」、「認識が可能とな

る今」、「危機の瞬間」。これこそが「永遠のなかの時」、「完成する時」としての「追想の時」である。

上述の「現在時」は、今村の表現を借りれば、「いまこそまさに何かが到来するまさにそのとき」（今村 2000, 143）である。これは、連続性のなかには存在しないのであるから、歴史的ではありながら、どの現在にも還元し得ない瞬間である。この現在時は、「そのなかで時間が立ち止まり停止した現在」であり、「連続を断ち切る決断の瞬間」である<sup>(5)</sup>。

「追想の時」に関するここまでの考察は、歴史哲学的な分析である。それでは、ベンヤミンはいつどのようにして、絶たれたものである幼年時代の記憶を再び手に入れることができたのか。記憶論の観点から記述してみよう。それはまさに、「追想の時」である「書き留める者の現在」（GS VI, 471）（下線による強調は神谷による）において、自分の経験の結果にもうひとつの切れ目を入れ、そこにある形象に対して、新しい、それ以前とは異なった排列（Gliederung）を認め、『ベルリン年代記』と『ベルリンの幼年時代』を書くという行為そのものによってなのであった。ベンヤミンは、ただ単に追想により意識のなかで再認するだけでなく、書くという行為、すなわちアレゴリーを駆使して過去の出来事にエクリチュールと名を付与するという行為によって根源へと至る道を拓こうとしているのである。

したがって、「追想の時」とは、「書き留める者の現在」が「現在時」となった、その瞬間であったのだ。

## 5 根源と未来

『ドイツ悲劇の根源』での論究によれば、ベンヤミンにとって、追想は「根源的了解へと遡る想起」であった。したがって、これまでの考察を踏まえれば、ベンヤミンの幼年時代の記憶は、非人称の集合的記憶と交差し、根源へと繋がっていることになる。

実は、ベンヤミンの考える「根源 (Ursprung)」は「起源」とは本質的に異なっている。

「根源は、なるほど全く歴史的なカテゴリーであるが、発生 (Entstehung) ということとは何の共通点もない。根源においては、発生したものの生成ではなくて、むしろ、生成と消滅のなかから発生しつつあるものが問題になるのである。根源は、生成の流れにおける渦であり、発生の素材を自己の律動のなかにまきこんでしまうのである。根源的なものは、むき出しの、あらわな事実の山のなかに、その真の姿を見せることは絶対はない。」（GS I, 226）

根源がEntstehung（発生・生起）と共通点をもたないということは、何かの始まりとしての起源とは無関係であるということの意味する（cf. 小林 1991, 220-221）。そして、根源は事実には属してはいない。「歴史的なカテゴリーである」とは、事実には属しているからではなく、根源は事実的なものありようの前史と後史に関わっている。

ここでは、事実における一回性と理念における反復性が弁証法的に相互に制約し合っているのであり、哲学的考察はこの弁証法へと問いを発してゆくべきなのである。根源における律動は、一方では復元として、他方では復元における未完成として認識されるべきものである。ベンヤミンの弁証法は、ヘーゲルの弁証法とは大

きく異なり、生成と消滅の弁証法であるとともに、一回性と反復性の弁証法であることが分かる。

「哲学的考察がとるべき方向は、根源のなかに内在する弁証法のうちに記載されている。この弁証法により、すべての本質的なものにおいて、一回性と反復性が相互に制約し合うものであることが明らかになる。」(GS I, 226)

こうした根源についてのベンヤミン独自の定義を理解するためには、『フランツ・カフカ』での次の記述も有効な手がかりとなる。

「忘却されているものは決して単に個人的なものではない。この認識をもって、われわれはカフカの作品のもつもうひとつ奥の敷居の前に立つことになる。忘却されているものはすべて、太古の世界の忘却されているものと混じり合い、これと無数の、定かならぬ、変転する結合をなしながら、繰り返し新たな奇形を生み出していくのだ。」(GS II, 430)

この忘却されているものが太古の世界の忘却されているものと混じり合い、変転し、新たな形象を産み出している場、これこそが「根源」である。したがって、「根源史」が問い尋ねるのは、過去の出来事や物ではなく、「形象」である。『パサーージュ論』のなかではゲーテの「原現象」と結びつけて次のように書かれている。

「弁証法的な形象とは、ゲーテの分析対象に対する要求、すなわち真の総合を提示するという要求にかなうような歴史対象の形式である。それは歴史の原現象である。」[N9a, 4]

また、「弁証法的形象」については、次のように書かれている。

「思考は、思考の運動と同時に思考の停止を必要とする。思考が緊張に充ち満ちた星座において停止するとき、そこには弁証法的形象が現

われる。」[N10a, 3]

そして、「真正さ (Echtheit)」も根源に関わる鍵概念である。真正さは、現象において根源の証しとなるしるしである (GS I, 227)。真正さは、唯一無二の在り方で再認と結びつく、ひとつの発見 (Entdeckung) の対象である。発見はさまざまな現象のなかから真正さを掘り出して明るみに出すことができる。最も特異なもの、最も歪んだもの、最も無力なもの、最もごちない試み、そして爛熟したもの、これらのなかから真正さを明るみに出すことができる。

例えば、「せむしの小人」は、まさに「最も特異なもの、最も歪んだもの、最も無力なもの」のアレゴリーである。遊歩者は、幼年時代の記憶への追想により、「せむしの小人」に出会い、その振る舞いのなかに、根源の証しである真正さを発見するのである。

さらに、ベンヤミンは、アウラの内容もこの「根源」に強く関わっていると考えている。アウラは、単に複製技術に対置された「いま、ここ」という一回性の現前に還元されるものではなく、歴史的なカテゴリーである「根源」を照射する、いわば光である (小林 1991, 228)。

ここでは『写真小史』で示されている、アウラの定義を確認しておこう。

「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の真昼、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは眺めている者の上に影を投げかけている木の枝を、瞬間あるいは時間がそれらの現われ方に関わってくるまで、目で追うこと—これがこの山々のアウラを、この木の枝のアウラを呼吸することである。」(GS II, 378)

ここに記されている「ある遠さが一回的に現われているもの」とは、空間のなかに、ある瞬間に、時間的な遠さが現われることを意味している。

このように、ベンヤミンにおいては、アウラは「近さのなかの遠さ」であった。これは「反復性のなかの一回性」でもある。そして、今村も言うように（今村 1995, 80-82）、アウラは人間にも適用することができる。

「私」にとって、「自己」は遠い。この遠い自己のひとつの様態が、まさに幼年時代の記憶に登場する私である。この自己はアウラを伴っており、現在の私には近くて遠い。ベンヤミンによる迂回の原理にしたがえば、遠い自己を捉えるためには遠い他者を經由する必要がある。集合的記憶が帰属する非人称の他者こそが遠い他者の様態である。このようにして、私は、追想によりアウラの有する「近くて遠い」という構造を經由して、根源に至るのである<sup>(6)</sup>。

そして、こうして解き明かされた「根源」は、「未来」への門でもある。

「根源こそが目標である。“Ursprung ist das Ziel.” これは、『歴史の概念について』第XIVテーゼに銘として掲げられたカール・クラウスの詩句である（GS I, 701/ WN 19, 102）。根源は目標である以上、未来から到来するという性格を帯びることとなる。もちろんこの未来は隠されている。

ベンヤミンの考える根源史は、可能態としての過去の経験のすべてである（今村 2000, 152）。そして、無数の異質な時間様式を有する、無数のモナド的事象による時間様式の複合として歴史的時間を概念的に把握すること、これこそが根源史としての可能態すべてを救済することである。この可能態すべては、輝く星た

ちが緊張をはらんで対峙する静止状態での星座である。そして、この「到来した可能態としての過去」こそが未来なのだ。（今村 2000, 164）

したがって、幼年時代の記憶を追想することは、いわば「未来を想起すること」でもあったのだ。『歴史の概念について』最終テーゼは、「未来のあらゆる瞬間は、そこを通過してメシアが出現する可能性のある、小さな門だったのである。」（GS I, 704/ WN 19, 106）と宣言する。幼年時代の記憶を通路に歴史の根源へと追想し得ること、これがこの「可能性」を支えている。

## 6 むすび

ベンヤミンにとって、『ベルリン年代記』や『ベルリンの幼年時代』で繰り広げられた幼年時代の記憶を考古学的に掘り起こす営みは、根源を希求する営みであった。「せむしの小人」と追想の果てに再び出会い、「忘却」のなかにある形象を取り戻すこと、これこそが、ベンヤミンが地層を掘り起こし探索し続けた、根源へと至る門である、（非人称の集合的記憶と交差する）幼年時代の記憶を取り戻すことそのものであったのだ。

それではここで、3部にわたって展開してきた本研究の最後に、再び『ベルリンの幼年時代』（「ティーアガルテン」）へと立ち戻ろう。

「当時、私をじっと見つめていた女像柱たちや男像柱たち、天使像たちやポモーナ像たちのうちで、私のいちばん身近なところには<sup>(7)</sup>、生（Dasein）に、あるいは家屋に踏みいるその一步を守護する、境界域（門）の事情に通じた一族の、あの埃をかぶった像たちだった。というのも彼らは、待つことに熟達しているからである。

そしてそうであればこそ、異郷の者を待つのであれ、古き神々の回帰を待つのであれ、また、30年前に学校鞆を背にその足許を通り過ぎた子どもを待つのであれ、彼らには同じことであった。彼らの合図で、ベルリンの旧西区は、古代の西の国になった。」<sup>(8)</sup> (GS VII, 395)

「彼は先に立って小径を歩いていった。すると、どの小径も、彼が歩けば急坂になるのであった。それらの小径は、一切の存在 (Sein) の母たちのもとへではないにせよ、確かにこの庭園の母たちのもとへと下っていた。彼がアスファルト道を歩めば、その足音はこだまを呼び起こした。私たちの行く舗道を照らしているガス灯は、この地面に二義性を帯びた光を投げかけていた。」<sup>(9)</sup> (GS VII, 394f.) (cf. 小林 1991, 244-)

ここに登場する母は、複数である。一切の存在の母たちのもとではないにせよ、私の母だけではない、多くの母たちのもとへ、換言すれば、集合的記憶のさらにその根源へと、この小径は下っているのである。

ベンヤミン自身の現在の「ティーアガルテン」の経験は、もちろん一回的なものである。1900年頃のヴァルター少年の経験もまた一回的なものである。しかし、それは同時に、非人称の誰かの経験でもあるものとして反復性を帯びている。

そして、ここに至って、本研究の問いに対して最終的な解が与えられる。すなわち、幼年時代の記憶と集合的記憶の関係は、根源への門となる、一回性と反復性の弁証法的関係であることが明らかになった。(完)<sup>(10)</sup>

## 凡例

(1) ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、

( ) 内にGSの略号の後に以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パサージュ論』(*Das Passagen-Werk*) 所収の草稿群については、[ ] 内に整理番号を記すことで示す。

なお、『1900年頃のベルリンの幼年時代』と『ベルリン年代記』については、以下の単行本も参照している。

Benjamin, W.(1962): *Berliner Kindheit um Neuzehnhundert*, Suhrkamp.

Benjamin, W.(1970): *Berliner Chronik*, Suhrkamp.

(2) ヴァルター・ベンヤミンの書簡からの引用箇所は、( ) 内にGBの略号の後に、以下の書簡集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, hrsg. von Theodor W. Adorno Archiv, Suhrkamp, 1995-2000.

(3) 新たに刊行が開始された『作品と遺稿』からの引用箇所は、( ) 内にWNの略号の後に巻数と頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe*, im Auftrag der Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur hrsg. von Christoph Göttsche und Henri Lonitz in Zusammenarbeit mit dem Walter Benjamin Archiv, Suhrkamp, 2008-.

(4) ベンヤミンのテキストからの引用に際しては、既存の邦訳書を適宜参照したが、訳文は必要に応じて神谷自身が訳し直している。

## 註

(1) ベンヤミンは、『ボードレールにおけるいく

つかのモチーフについて』においては、「想起」(Erinnerung)をプルーストの「意志的記憶」(mémoire volontaire)とほぼ同義のものとして使い、「記憶」(Gedächtnis)をプルーストの「無意志的記憶」(mémoire involontaire)と同一とみなし、両者の区別の重要性に注意を喚起している(GS I, 612, Fußn.)。そして、ベンヤミンはバルクソンの『物質と記憶』における「純粹記憶」とプルーストの「無意志的記憶」を同一視している(GS I, 609)。

ただし、こうした分類は、必ずしも首尾一貫したものではなく、『ドイツ悲劇の根源』のなかでは、使い分けられてはいない。

- (2) この「月」という断章は、最終稿では、ベンヤミン自身の手でかなり修正や変更が加えられている。その最終稿では削除された部分に、幼年時代と大人との隔たりを考える際に重要な記述が含まれている。
- (3) 本研究では主題的に扱うことはできないが、「せむしの小人」が『歴史の概念について』第Iテーゼでは、神学の形象、あるいは神学のアレゴリーとして現われていることにも注意が払われるべきである(GS I, 693/ WN 19, 93)。
- (4) このテーゼを直接の分析対象として語られているものではないが、浅井がヘルマン・ブロッホの生誕100年を記念する文章のなかで「経験体の時間」を巡って繰り広げている次の洞察は、このテーゼを理解する上で重要な手がかりとなる。

「現在とは、個の時間が、他者の時間を媒介し他者の時間に媒介されつつ、歴史の時間に転化する意識空間にほかならない。」(浅井 1994, 13)

- (5) 『ベルリン年代記』のなかには、メシア的な時間のかげらが混ざっている「現在時」において、可能態としての過去を救済する経験の原型と言い得る経験が書かれている。「私が思い出すこの幸福には、しかし、もうひとつ別の幸福が溶け込んでいる——すなわち、この幸福を思い出のなかに所有している」という幸

福が。私はこれら二つの幸福を、いまではもう、別々に分けることができない。」「それはまるで、私がここで報告する瞬間は二度と再び私から完全に失われはしない」という資性を授けられていたことが、その瞬間が与えてくれる贈り物の一部分でしかないかのようなのだ。」(GS VI, 515f.)

- (6) 根源とアウラを結びつけて主題的に十分に考察しようとするれば、「痕跡」について考えることも避けて通れない。この課題についてはさしあたり「1938年12月9日付け、テオドル・W・アドルノ宛て書簡」(GB VI, 181f.)を参照のこと。
- (7) この部分はアドルノーレックスロート稿では、「私がいちばん好きだったのは」となっている(GS IV, 238)。
- (8) ベンヤミンは、1892年7月15日、ベルリン旧西区マクデブルク広場4番地で生まれた。この旧西区は、ティーアガルテンの南側一帯に広がる。
- (9) 『パサージュ論』のなかにも、これと類似の記述がある[M1, 2]。
- (10) この結論を踏まえて、A. ロッシの『都市の建築』と『科学的自伝』を読み解くこと、および、W. G. ゼーバルトの『アウステルリッツ』を吟味すること、これは極めて魅力的なプロジェクトである。そして、このプロジェクトの成果は、やがてわたくしの「固有名と記憶」を巡る研究に反映されることになる(cf. 神谷 2010)。

## 参考文献

- Adorno, Theodor W. (1970): *Über Walter Benjamin*, Suhrkamp.
- Arendt, Hannah(1958): *The Human Condition*, University of Chicago Press.
- Assmann, Aleida(1999): *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*, C. H. Beck.

- (2006): *Der lange Schatten der Vergangenheit : Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*, C.H. Beck.
- (2007): *Geschichte im Gedächtnis : Von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*, Krupp-Vorlesungen zu Politik und Geschichte am Kulturwissenschaftlichen Institut im Wissenschaftszentrum Nordrhein-Westfalen, Bd. 6, C.H. Beck.
- Bergson, Henri(1959): *Œuvres*, Édition du centenaire, P. U. F.
- (1985): *Matière et mémoire*, 94<sup>e</sup> édition, P. U. F.
- Handelman, Susan A. (1991): *Fragments of Redemption: Jewish thought and literary theory in Benjamin, Scholem, and Levinas.*, Indiana U.P.
- Lemke, Anja(2007): *Gedächtnisräume des Selbst: Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, 2 Aufl., Königshausen & Neumann.
- Menninghaus, Winfried(1986): *Schwelkenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.
- Mosès, Stéphane(2006): *L'ange de l'histoire: Rosenzweig, Benjamin, Scholem*, Gallimard.
- Muthesius, Marianne(1996): *Mythos Sprache Erinnerung: Untersuchungen zu Walter Benjamins "Berliner Kindheit um neunzehnhundert"*, Stroemfeld.
- Opitz, Michael und Wizisla, Erdmut(hrsg.)(2000): *Benjamins Begriffe*, Suhrkamp.
- Proust, Marcel(1987-1989): *À la recherche du temps perdu*, Nouv. éd. 4 vols., Bibliothèque de la Pléiade, v. 100-102, 356, Gallimard.
- Rossi, Aldo(1982): *A Scientific Autobiography*, The MIT Press.
- (2011): *L'architettura della città*, Quodlibet.
- Ricoeur, Paul(1984): *Temps et récit, tome II , La configuration dans le récit de fiction*, Seuil.
- (2000): *La Mémoire, l'histoire, l'oubli*, Seuil.
- (2004): *Parcours de la reconnaissance : trois études*, Stock.
- Sebald, W. G.(2001): *Austerlitz*, Carl Hanser.
- Witte, Bernd(hrsg.)(2008): *Topographien der Erinnerung : zu Walter Benjamins Passagen*, Königshausen & Neumann.
- 浅井健二郎 (1994) : 『経験体の時間—カフカ・ベンヤミン・ベルリン—』 高科書店
- (1996) : 『解説』、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』 筑摩書房くちくま学芸文庫>
- (1997) : 『解説』、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション3 記憶への旅』 筑摩書房くちくま学芸文庫>
- 今村仁司 (1995) : 『ベンヤミンのく問い—「目覚め」の歴史哲学—』 講談社く講談社選書メチエ>
- (2000) : 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』 岩波書店く岩波現代文庫>
- 大小田重夫 (2008) : 「記憶と忘却—バルクソンとリケール—」、『哲学』44号、北海道大学哲学会、67-80
- 柿木伸之 (2001) : 「経験のく非—場所>へ—ベンヤミンのく認識>の理論—」、『哲学科紀要』26、上智大学文学部、47-86
- (2005) : 「経験の廃墟から新たな歴史の経験へ—経験の可能性を探究するベンヤミンの思考をめぐる—」、『比較思想研究』32、比較思想学会、37-48
- 鹿島 茂 (1996) : 『『パサージュ論』熟読玩味』 青土社
- 神谷英二 (2009) : 「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』17(2)、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- (2010) : 「固有な名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』18(2)、福岡県立大学人間社会学部、13-25
- (2011) : 「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」、『福岡

県立大学人間社会学部紀要』19(2)、福岡県立大学人間社会学部、65-76

— (2012) : 「幼年時代の記憶と集合的記憶(2)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』20(2)、福岡県立大学人間社会学部、15-27

川口茂雄 (2012) : 『表象とアルシーヴの解釈学—リクールと『記憶、歴史、忘却』—』京都大学学術出版会

川村二郎 (1991) : 『アレゴリーの織物』講談社

小林康夫 (1991) : 『起源と根源—カフカ・ベンヤミン・ハイデガー—』未来社

多木浩二 (2003a) : 「場所と境界—ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』・空間の思考12」、『ユリイカ』35(10)、青土社、30-39

— (2003b) : 「街の名前あるいは都市の言語化—ベンヤミンにおける固有名詞・空間の思考13」、『ユリイカ』35(11)、青土社、19-27

— (2004) : 『雑学者の夢』岩波書店

田中 純 (2007) : 『都市の詩学—場所の記憶と徴候—』東京大学出版会

近森高明 (2007) : 『ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶醉経験』世界思想社

道籐泰三 (1997) : 『ベンヤミン解説』白水社